

## 博士論文

# カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの作品における地平線・水平線及び視点の設定 —空をモチーフとした絵画表現の分析及び制作実践—

## (要旨)

平成 27 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

湯澤美麻

本研究は、ドイツ・ロマン主義の画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ (Caspar David Friedrich 1774-1840) の風景画に見る特性について、画中の地平線・水平線及び視点の設定と空の表現に着目し考察するものである。

フリードリヒの風景画は、非日常的な空気感や神秘性を漂わせており、その雰囲気を生み出す重要な要素の1つが、空の表情である。フリードリヒの描く空は、色彩、光や雲の描き方において、多様な表現が見られる。空が印象的に描かれたフリードリヒの風景画では、画中の地平線・水平線の位置や描き方、視点の位置に特徴が見られ、それらが空の見え方と全体の印象に、強い影響を与えているように感じられた。本論において、地平線・水平線は空と大地をつなぐ境界線、視点は描く際に風景と対峙する位置であり、鑑賞者が描かれた風景と対峙する位置と同等のものであると定義した。フリードリヒの風景画には、極端に低い位置に地平線・水平線及び視点が設定されているものや、反対に山頂を見下ろす非常に高い位置に視点が設定されているものが存在する。そのような構図が、描かれた空の見え方に影響を与え、フリードリヒの独特で神秘的な空間の表現につながっているように感じられた。よって、地平線・水平線及び視点の設定が画中でどのように作用しているか考察することによって、フリードリヒの作品における神秘性を生み出すメカニズムを明らかにし、その独自性を示すことができると考えた。

## 研究の背景

フリードリヒの初期の油彩画の作品には、地平線・水平線が画面の3分の1以下の低い位置に設定された構図が多く見られる。その中でも、《海辺の修道士》などの海景画では、空が画面のおよそ5分の4の面積を占めており、視点も低い位置に設定されている。一方で、《リーゼンゲビルゲの朝》などの山岳風景画では、山頂を見下ろす非常に高い位置に視点が設定されており、風景を広々と捉えている。これらの作品に見る地平線・水平線及び視点の設定は、フリードリヒの晩年までの油彩画の中で際立っており、描かれた風景が強い神秘性を放っている。

地平線・水平線及び視点の設定が、フリードリヒの作品における特性の1つであるということは、フリードリヒの海景画との類似性が指摘されている17世紀オランダの風景画<sup>注1</sup>や、フリードリヒと同じロマン主義であり同時代にイギリスで活躍した、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（Joseph Mallord William Turner 1775-1851）やジョン・コンスタブル（John Constable 1776-1837）の風景画との比較からも推測された。フリードリヒの作品と、17世紀オランダの風景画、ターナーとコンスタブルの作品には、地平線・水平線及び視点の設定で類似点が多く見られるが、そうした中でも、フリードリヒの作品に見られた極端に地平線・水平線を低く設定した構図や、非常に高い位置に視点を設定した構図は、極めて異質であった。また、フリードリヒが描く地平線・水平線は、他の画家のものと比較して水平性が強調されており、風景には静けさがもたらされている。このことから、画中の地平線・水平線の位置や表し方、視点の位置の設定は、フリードリヒの風景画の特徴の1つであり、独特な雰囲気を生み出す要因となっているのではないかと考えた。

考察するにあたって、フリードリヒに関する文献23件、論文や雑誌記事13件の先行研究を中心に参考とした。主なものを以下にまとめた。

- ・ Helmut Börsch-Supan *Caspar David Friedrich*
- ・ ゲルトルート・フィーゲ『カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ』
- ・ ハンス・ヨアヒム・ナイトハルト『ドイツ・ロマン主義絵画—フリードリヒとその周辺』
- ・ ヘルベルト・フォン・アイネム『風景画家フリードリヒ』
- ・ ロバート・ローゼンブラム『近代絵画と北方ロマン主義の伝統：フリードリヒからロスゴへ』
- ・ 小林敏明『風景の無意識—C.D.フリードリヒ論』
- ・ 千足伸行『ロマン主義芸術—フリードリヒとその系譜』
- ・ 仲間裕子『C.D.フリードリヒ《画家のアトリエからの眺め》—視覚と思考の近代』
- ・ 江川均「C・D・フリードリヒの一八二〇年前後における大気のもティーフ——L・ハワードの気象学との関連について——」『美学 第48巻1号』

フリードリヒの作品は、それ以前の風景画とは大きく異なる、革新的なものであったことが指摘されている。ヘルベルト・フォン・アイネム（Herbert von Einem 1905-1983）によれば、風景画でありながら宗教性を持っている点や、遠近法に則さず空間が構成されている点が、当時では異例のことであった<sup>注2</sup>。また、アイネムは、モチーフによって形作られる線を「平面的な装飾」として用いている点にも、フリードリヒの独自性があると述べている<sup>注3</sup>。仲間裕子（1953-）は、そ

のようにして生み出される幾何学的な形態について具体的に指摘し、フリードリヒの画面構成の特徴を明らかにしている<sup>注4</sup>。フリードリヒの作品の主題に関しては、ヘルムート・ベルシュ＝ズーパン（Helmut Börsch-Supan 1933-）がキリスト教の思想を基に分析しており、フリードリヒの作品において空は宗教分野のシンボルであるとしている<sup>注5</sup>。そのように指摘されている空の表現について、江川均（生年不詳）は気象学との関係性に着目し研究している<sup>注6</sup>。画中の地平線・水平線及び視点の設定に関しては、小林敏明（1948-）が《海辺の修道士》の水平線や《リーゼンゲビルゲの朝》の高い視点の設定によるパノラマ的表現について述べているが、研究のテーマは崇高という概念が貫いており、主題や精神的な内容に関わるものが主である<sup>注7</sup>。

以上のように、フリードリヒの作品について、先行研究では画中の地平線・水平線及び視点や描かれた空について着目されてはいるものの、それらが作品全体の印象にどのように作用しているか、具体的なメカニズムについて述べられているものは見られなかった。

## 研究の目的

本研究の目的は、フリードリヒの風景画における地平線・水平線の設定や表し方、視点の位置の設定が、画面上でどのような視覚的效果をもたらし、表された内容とどのように関係し働きかけているかということについて、明らかにすることとした。作品を印象づける重要な要素である空の表現にも着目し分析していくことで、フリードリヒの作品における神秘的な雰囲気を生み出すメカニズムを解明し、フリードリヒの独自性を示していくことにつながると考えた。また、筆者は空をモチーフとした絵画制作を行っており、自身の制作において新たな展開を図ることも目的の1つとした。

## 研究の対象と方法

フリードリヒの作品について、地平線・水平線及び視点の設定に特徴が見られた、海景画や山岳風景画を中心に対象を絞って考察した。本論は2部に分けて考察を行った。

第1部ではフリードリヒの作品について、17世紀オランダの風景画と、ターナーとコンスタブルの風景画との比較から分析を行った。関連性の高い作品を比較対象とすることで、フリードリヒの地平線・水平線の位置の設定や表し方、視点の位置の設定について、表面上の特性だけでなく、描かれた内容との関係を浮き彫りにすることができると思った。17世紀オランダの風景画は、フリードリヒ

の作品と構図上の類似点が多いため、主に構図の観点において参考とした。ターナーとコンスタブルは、フリードリヒと同じロマン主義であるという主題に関わる点が共通している一方で、描画技法は大きく異なっていることから、特にそれらの点に着目し比較することで、フリードリヒの作品の特性を明らかにすることを試みた。先行研究を踏まえて、実見調査に基づく作品分析を中心に考察した。構図に関しては、ある程度は図版からも把握できるが、そこから感じられる効果や印象、細かな部分におけるモチーフ同士の関係性は、実見しないとわからない部分も多いためである。画面の筆致やマチエールの様子についても分析し、表された内容との関係性や意図を明確にすることを図った。実見調査では写真撮影によっても記録を行い、絵具の様子について細部まで記録し分析を試みた。

第2部では筆者の制作実践を通して、第1部で明らかにした内容について検証し、考察を深めた。筆者は自身の制作において、独自の目線から空を描く一方で、フリードリヒの空の表現や構図について研究を行い、そこで得られたことを取り入れながら展開してきた。そのような筆者の制作を振り返って分析することによって、フリードリヒの作品における地平線・水平線及び視点の設定についての考察をより深めるとともに、現代の絵画表現においてフリードリヒに着目する意義や、筆者自身の今後の制作展開の課題を明らかにした。

## 論文の構成及び各章の概要

### 第1部 フリードリヒの画面構成における地平線・水平線及び視点

#### —17世紀オランダ及び19世紀ロマン主義の風景画との比較分析から—

第1章「フリードリヒの作品の概要と空の表現及び画面構成の特徴」では、まずフリードリヒの生涯の変遷や思想、作品の特徴について先行研究を基にまとめた。そして、これまでの筆者によるフリードリヒの空の表現方法に関わる研究の成果を述べ、フリードリヒの作品における地平線・水平線及び視点の位置の変遷について、ベルシュ＝ズーパンとカール・ヴィルヘルム・イエーニッヒ（Karl Wilhelm Jähnig 生年不詳）による『Caspar David Friedrich Gemälde, Druckgraphik und bildmäßige Zeichnungen』に記載されたフリードリヒの作品総目録を基に筆者が作成したフリードリヒの油彩画作品一覧と、実見調査を基に分析した。

第2章「17世紀オランダ及び19世紀ロマン主義の風景画における空と地平線・水平線及び視点」では、フリードリヒの作品の比較対象とする、17世紀オランダの風景画、ターナーとコンスタブルの風景画について、空の表現や地平線・水平線及び視点の設定の特徴から述べた。フリードリヒの作品についてもあわせて述べることで、17世紀オランダの風景画、ターナーやコンスタブルの風景画と

の関連性を示し、第3章以降の比較対象とする作品を整理した。

第3章「地平線・水平線が作品に与える影響とその表現方法」では、フリードリヒの作品における地平線・水平線について、低い位置に設定された構図、画中の水平性としての働きや描かれ方に着目し、考察した。

第4章「視点の設定がもたらす空間の変化と主題との関係性」では、フリードリヒの作品における視点の位置の設定が、モチーフの関係性や、鑑賞者に与える画中の空間や空の印象とどのように関係しているか、低い位置に視点が設定された構図と非常に高い位置に視点が設定された構図に分けて考察した。

## 第2部 筆者作品から考察するフリードリヒの作品の特性

第1章「筆者作品の変遷とフリードリヒの構図を取り入れた制作」では、フリードリヒの研究を並行して行うことで生じた筆者の作品の変化を分析し、第1部で明らかにしたフリードリヒの作品の特性について考察を深めた。同時に地平線・水平線及び視点の設定が、絵画作品の主題に与える影響について考察した。

第2章「筆者が独自に試みた制作展開」では、フリードリヒの作品の研究とは切り離れた、筆者が独自に試みた制作展開の特性について分析を行った。筆者は作品の中で描く対象を様々な角度から捉えた自由な空間構成を試みており、そのような制作の背景にある現代の表現の特性にも着目することで、フリードリヒの作品の特性を再確認し、現代においてフリードリヒの作品を見直す意義について考察した。

## 結論

第1部にて、フリードリヒの作品における地平線・水平線及び視点について、海景画や山岳風景画を中心に考察した結果、地平線・水平線や視点が低い構図における絵画の平面性を意識した構成、水平性が強調された地平線・水平線の描写、非常に高い視点から捉えた構図における臨場感のある立ち位置の設定が、フリードリヒの作品の独特な印象を生み出していることがわかった。

地平線・水平線が低く設定されたフリードリヒの作品では、描き入れるモチーフを必要最低限に絞るだけでなく、雲などによる具体的な形態を取り払い、空を色面に近い状態で表すことで、構図の単純化を図っている。視点を低く設定した構図では、前景のモチーフと後景のモチーフを前後に重なるように配置することや並列して描くことで、それぞれに与えた意味を対比している。これらの計算的な構成は絵画の平面性を意識した組み立てであり、風景に込められたキリスト教の思想などの寓意の伝達の効果を高めている。

地平線・水平線の描き方にも、絵画の平面性に対する意識が表れている。フリ

ードリヒの作品における地平線・水平線は、まっすぐ平滑に描かれることや厚みのあるマチエールによって水平性が強調されている。空と大地をつなぐものというよりも、画面における水平性としての役割が高められ、作品に強い静寂をもたらしている。

フリードリヒは、そのように平面性を意識し作為的に画面を構築しているながらも、視点の位置に合わせて空間を構成し、モチーフを配置している。視点が非常に高く設定された山岳風景画では、立ち位置の設定によって鑑賞者の視線を風景の中へと引き込み、臨場感を与えている。立ち位置を明確に定めない構図では、地に足がつかない浮遊感を鑑賞者に与えることで、空を漂うような感覚を生み出し、自然の神秘を体感させている。

これらの特徴からは、フリードリヒが絵画を平面的に捉え表現する一方で、個々のモチーフの見え方と空間の関係を意識して構図を組み立てていることが確認できた。モチーフの配置などは作為的でありながらも、鑑賞者が描かれた風景を自然に受け入れられる構造となっている。作為と自然という、相反するものが共存し1つの画面が表されていることが、フリードリヒの作品における神秘的な空気感を生み出している。

第2部における筆者の制作の分析からは、フリードリヒの作品における神秘性を生み出すメカニズムが、自然の根源に迫ろうとする行為と密接に関わっていることが考えられた。

筆者の作品では、フリードリヒの作品を研究する以前は、人物の動作と雲の流れによって動きのある情景を表現し、天地にとらわれることなく地平線・水平線及び視点を設定することで、劇的な印象を強めていた。しかし、実際に広漠な風景を目にした経験や、フリードリヒの構図を取り入れた制作を経て、自然の風景と水平に対峙するようになった。画面には空と大地のみが残り、空から雲も消え去った。描く対象である自然と向き合っていくことで、主観的な目線で表していた作品が普遍性を持つようになり、描く要素が限定されていったのである。

そのような筆者の作品の変化からは、フリードリヒの作品に見られた、徹底して単純化された構図、感情的なものを取り払うかのように水平性を強調した地平線・水平線やまっさらな空の表現は、自然と向き合っていく過程で、描く対象が限定されていった結果であると考えた。フリードリヒは、作為的に画面を組み立てることで視覚的な部分を探究しながらも、自然の根源に迫り神の存在と向き合うという思想を、常に制作の軸に据えている。そのような思想を込めた風景を、主観的ではなく誰もが受け入れられる普遍的な目線で表している。

それに対して、自由に空間を構成した筆者の作品が主観的な目線で表されてい

たように、現代ではカメラやコンピューターの普及によって個人の見方が強く反映された多様な表現が溢れかえっており、視覚的に新しく強い印象を持つものを追い求める傾向にある。そうした中で、フリードリヒの作品に表れている本質的なものや普遍的なものと同じ姿勢は、何を表現し、何と向き合うのかという、表現の根底の部分を見直す上で重要なことである。そこに、現代においてフリードリヒの作品に着目する意義があると考えた。

以上のように、フリードリヒの作品における神秘的な雰囲気を生み出すメカニズムについて、地平線・水平線及び視点の設定の考察に空の表現を絡めて検証し、制作者の立場から描画技法の分析や制作実践によって多面的に理解を深めたことに、本研究の意義があると考えられる。

今後の課題としては、フリードリヒの作品における地平線・水平線及び視点の設定について、モチーフの配置や見え方等からより正確な位置の分析を行い、全体を表にまとめるなどして統計的に示し特徴を見出していくことがあげられる。また、フリードリヒの作品の主題について、より多くの海外の文献を調査していく必要がある。本研究では、フリードリヒの作品における神秘性のメカニズムと自然と向き合うという行為が密接に関わっているとしたが、この2つは対極に位置している。自らが生み出す秩序に則して、作為的に風景を組み立てるフリードリヒの行為は、自然を操作し支配しているとも言える。そうした点に関して、西洋の自然観にも着目しながら明らかにしていく。

すでに述べたように、現代の多様なものの見方にはカメラやコンピューターの普及が深く関わっており、そうした時代の変化と絵画との関係性についても今後筆者の研究において着目していく必要がある。筆者自身の制作では、フリードリヒの作品の研究から得た、表現する対象の本質と向き合うという姿勢を制作の軸に据え、現代において次々に生まれていく多様な視覚や表現を受け止めることで、新たな展開を見出していくことが可能となると考える。

---

注1 ロバート・ローゼンブラム『近代絵画と北方ロマン主義の伝統：フリードリヒからロスコーへ』神林恒道・出川哲朗訳、岩崎美術社、1988年、20頁参考。

注2 ヘルベルト・フォン・アイネム『風景画家フリードリヒ』藤縄千艸訳、高科書店、1991年、110-113、117頁参考。

注3 同上、117-118頁参考。

注4 仲間裕子『C.D.フリードリヒ《画家のアトリエからの眺め》—視覚と思考の近代』三元社、2007年、80頁参考。

注5 Helmut Börsch-Supan, *Caspar David Friedrich*, Sarah Twohig trans. George Braziller, 1974, 83頁参考。

注6 江川均「C・D・フリードリヒの一八二〇年前後における大気のもティーフ——L・ハーワードの気象学との関連について——」『美学 第48巻1号』美学会、1997年。

注7 小林敏明『風景の無意識—C.D.フリードリヒ論』作品社、2014年。